Osaka University Knowledge Archive

Title	前漢における予言・「謡」の諸相 : 中国政治思想の深層
Author(s)	串田, 久治
Citation	中国研究集刊. 1991, 10, p. 21-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61187
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

前漢における予言・「謠」の諸相
――中国政治思想の深層

串田久治

はじめに

苛酷な政治への恨みや厳しい生活の悲しみを歌う詩は、たとえば『詩經』の中に散見する。また、苦しみ悲しみを切々と謳う歌が世界中に存在することは誰もが知っている。しかし、中国には詩という文学だけでなく、詩のジャンルに組み入れられていない「謠」というものがある。後に劉總は漢代の文章の文体を論じて、「謠」を詩ではなく文のひとつに数えた（『文心雕龍』雑文第十四）。

そもそも「謠」とは、「徒（ただ）歌う、之れを謠と謂う」（『爾雅』釋樂第七）、「肇とは徒だ歌うなり」（『説文解字』）、「曲ありて樂に合するを歌と曰い、徒だ歌うを謠と曰う」（『詩經』魏風、「園有桃」の毛傳）とあり、郝懿行が「謠とは、絲竹の類無くして獨（た）だ之れを歌うを謂う」（『爾雅義疏』）と言うように、伴奏のない歌を意味していた。しかし、鄭玄が「心の憂うる、我れ歌い且つ謠う」の一句に、「我が心　君の行い此くの如きを憂う。故に歌謠して以て我が憂いを寫す」（『詩經』同上、鄭箋）と解説しているように、「歌」も「謠」も人々の心の憂さをはらすものとして存在した。一方、「臚言を市に風聽し、祆祥を謠に辨つ」（『國語』晉語六）、「童謠も猶お聖人の耳目を助く」（『抱朴子』勗學）とも言うように、伝聞も「謠」も民を知るための好材料であった。事実、潁川を治めた韓延寿は怨恨のはびこった潁川の民に、「人人に問うに謠俗・民の疾苦する所を以てし、爲に和睦親愛して怨咎を銷除するの路を陳ぶ」と、民間に謳われている歌謠を有効的に治理に役立てている（『漢書』韓延壽傳）。

本稿では「憂いを寫す」ために謳われた「歌」と「謠」を厳密に区別しない。と言うのは両者にいくつかの共通点が見られるからである。まず、ある特定の人物に恨みを抱く人々が自分たちの怒りや苦しみを、責任の所在不明の形で謳って不満を爆発させること、言葉遊びによって内容に広がりをもたせることなどがあげられよう。言うまでもなく、言葉遊びは古代漢語や

現代漢語の専売特許ではない。あるいは世界のあらゆる言語にあるのかもしれない（注一）。しかし、ここでは言葉遊びは単に遊びではなく、政治への不満の爆発となり社会への痛烈な批判となる。恨み悲しみは憎しみとなり、一向に希望が見えないにもかかわらず、また、自分達のおかれた立場が弱く悲観的な状況は変わらないにもかかわらず、決して遊び心を失わない。これが「歌」であり「謠」である。更にその遊びは漢字の字面に現れる（注二）とは限らず、時には複雑難解な遊びがある。一見一聞しただけではわからないが、悲しみ苦しみを共有する者にはすぐにそれと解る謎がある。更にその多くは「予言」が付与されていることも共通するところである。「予言」の内容を理解すれば、そこには社会や為政者を批判することが難しかった古代中国人の弱者の知恵を垣間見ることができる。本稿のねらいは、これまであまり論ぜられることのなかった「歌」と「謠」（注三）のいくつかを取り上げて、そこに隠された意味、それらが「予言」するものを分析し、「謠」が果した社会的な役割を前漢一代において考察することにある。

一、呂后をめぐって

高祖劉邦の皇后呂氏。彼女は劉邦が漢王となったその年に、「高祖、天下を定むるを佐け」たという理由で、その父親を臨泗侯に封じ、その後、二人の兄、呂澤と呂釋をそれぞれ周呂侯・建成侯に封じて、皇后の時にすでに三人の呂氏の諸侯を出した。そして高祖の死後、太后となってからは、周呂侯の子の呂台を呂王、台の弟の産を梁王、台の子の通を燕王、建成侯呂釋の子の禄を趙王と四人を王とし、また、都合六人の身内を列侯として、劉氏以外の呂氏の諸侯王を誕生させた。

「人と爲り剛毅」な呂后は、劉邦が漢王となった後に寵愛した戚夫人と、その子趙王如意をことのほか憎んだ。その原因はいくつかある。まず高祖自身が呂后の子供を「人と爲り仁弱」で「己に類せず」、そのために気にいらず、それを廃嫡して自分に似ている如意を太子に立てたいと考えていたこと、また、戚夫人も「日夜啼泣して、其の子を立てんことを欲し」、如意自身も「太子に代わらんことを幾うこと數〻」であったこと、更には、年とった呂后は高祖に「見えること希に、益〻疏んぜられ」ていたことなどが数えられる。しかし、呂后はかろうじて自分の子供を太子に立てることに成功する。そして高祖が崩じ、十七歳の若さで皇帝に即位した「仁弱」な恵帝の皇太后として君臨した彼女は、ここに復讐劇を開始する。

恨みの矛先は、自分の子供から太子の位を奪おうとした戚夫人と子如意に向けられる。呂太后は戚夫人を幽閉し、頭髪を剃って鉄の首輪をはめて舂かせた。戚夫人は泣きながら、「子は王爲り、母は虜爲り。終日舂きて薄暮なり。常に死と伍爲り。相い離るること三千里。當に誰に使いして女に告げしむべし」と歌ったが、趙王に助けを求めていることを知った呂太后は、ま

ずは趙王の殺害を決意する。それとなく察知した「慈仁」なる恵帝は「起居飲食を與にし」て守ったが、寝坊した趙王は鴆毒（鴆という毒鳥の羽根を浸した酒）を飲まされて殺された。そして呂太后は「遂に戚夫人の手足を斷ち、眼を去りて耳を熏べ、瘖藥を飲ませて、鞠域中に居ら使め、名づけて人彘と曰う」と、残虐の限りをつくした。その上、数カ月も放置したその「人彘」を息子の恵帝に見せ、それが戚夫人であることを教えるという、どこまでも残虐なことをやってのけたのである。これはお前のためにしたことだ、呂太后は恵帝にそう言おうとしたのかもしれないが、もともと「仁弱」かつ「慈仁」の恵帝は「大いに哭き、因りて病み、歳餘も起つこと能わず」、とうとう人を介して母親に、「此れ人の爲す所に非ず。臣　太后の子爲れば、終に復た天下を治むること能わず」と宣告した。それからというもの、かれは日々淫楽に耽り、七年にして崩じた。

酒に溺れ廃人同様になった恵帝に代わって政を執った呂太后は、子供の生まれない恵帝の皇后に後宮の子を引き取らせ、その母親を殺して太子とし、恵帝の死後、立てて帝とした（少帝恭）。ところが、天子となって四年目、出生の真相を知った少帝は、「太后　安くんぞ能く吾が母を殺して我れを名づけん。我れ壯たりて即ち爲す所（報復）を爲さん（変を為さん）」、いずれ生みの母親を殺した復讐をしてやると口にしたために幽閉された。呂太后は、帝は重病と偽って側近の者にも謁見させず、ついに幽死させた。そして、次に恒山王弘を帝に立て、呂太后の甥（呂禄）の娘を皇后とし、「根を連ね本を固めて牢ならんと欲すること甚し」く、呂氏一族の安泰を図った。しかし、それも「益無きなり」。なぜなら、少帝弘の六年（高后八年）、「呂太后崩ずるや、大臣　之れを正し、卒に呂氏を滅ぼし」、「分部して悉く諸呂の男女を捕え、少長と無く皆な之れを斬る」、呂氏一族は皆殺しとなったからである。

この呂太后が、亡くなる前年に宴会を開いた。太后自身が我が子のようにかわいがった朱虚侯劉章（高祖と曹夫人との間に生まれた斉悼恵王の子供。太后はかれを朱虚侯に封じ、呂禄の娘を妻わせた）は、酒宴酣にして太后に「耕田」の心がけを謳いたいと申し出た。

深く耕して穊く種まき（よく耕して密に種をまき）、
苗を立てるには疏ならんと欲す（苗はまばらに植えるのがよい）。
其の種に非ざる者は（そしてその種でないものは）、
鉏きて之れを去れ（根こそぎ鋤で取り去れ）。

これを聞いた呂太后は「黙然たり」。なぜなら、「深く耕して穊く種まき」とは「多く子孫を生む」こと、「苗を立てるには疏ならんと欲す」とは「之れ（劉氏の子孫）を四散して置き、令して藩輔と爲す」ことであり（顔師古注）、「其の種に非ざる者は、鉏きて之れを去れ」とは、劉氏以外の者（呂氏一族）

を抹殺せよと言うにほかならないからである。自ら「兒子のごとく畜（やしな）って呂氏一族の仲間入りを許したつもりの劉章に、ところもあろうに宴席で罵倒されたのである（『史記』齊悼惠王世家、『漢書』高后紀・高五王傳・外戚傳）。

このように言えば、劉章は命懸けの一か八かの大勝負をしたかのようであるが、かれとてそれほどの危険は冒さない。その意味を追及されれば逃げる手は作ってある。この歌の中に用意してある。これを純粋に農耕の心がけを歌うものだと言うこともできるし、更にもっと積極的に嘘で固めた謎解きをすることもできる。すなわち、「あなたはここまで苦労して呂氏一族を繁栄させられた。この天下を安泰に導くには邪魔者が多すぎる。今こそ呂氏以外の者を抹殺して、将来の不安を取り除かれるべきです」と。しかし、ここで呂太后は劉章のこの歌の意味を追及するどころか、「黙然たり」と圧倒されるだけ。戚夫人を「人彘」にしたころの呂太后の勢いを思えば、何もできずただ「黙然」としている太后に権勢の翳りが見て取れる。

ところがこの翳り、恵帝の四年（この時すでに恵帝は酒浸りで、太后が政治の実権を握っていた）に起きた未央宮の火災に、早くも予言的に現れていたのである。『漢書』は「恵帝四年十月乙亥、未央宮の凌室に災あり。丙子、織室に災あり」と記したすぐ後に、次のような劉向の解説を載せる。

元年、呂太后　趙王如意を殺し、其の母戚夫人を殘戮す。是の歳、十月壬寅、太后　帝の姉魯元公主の女を立てて皇后と爲す。其の乙亥、凌室に災あり。明日、織室に災あり。凌室は飲食を供養する所以、織室は宗廟に衣服を奉ずる所以にして、『春秋』の御廩と同義なり。天　戒めて若（か）く曰く、「皇后　宗廟を奉ずるの徳亡く、將に祭祀を絶たんとす」と。

恵帝四年、十月乙亥、未央宮の凌室に火災が発生し、翌日も織室に火災が発生した。これは呂太后が趙王如意を毒殺し、その母戚夫人を惨殺した恵帝元年十月の同じ乙亥の日に凌室に火災が発生し、また同じく翌日の丙子の日に織室に火災があったのと相通ずると言うのである。すなわち、恵帝四年の二つの火災は「帝の姉魯元公主の女」、すなわち呂太后の実の娘の子張氏を恵帝の皇后とすることの非を戒めたものということになる。しかし、恵帝に呂氏と無縁の皇后を与えては、呂氏一族の安泰は図れない。否、彼女はそれでも安心できなかった。二人の間に跡継ぎを作らねばならない。だが、「將に祭祀を絶たんとす」は現実となり、彼女の思いは裏切られた。しかたなく後宮の子を、まるで二人の間に生まれた子であるかのように仕立てたのである。それが、「太后　安くんぞ能く吾が母を殺して我れを名づけん。我れ壯たりて即ち爲す所を爲さん」と反逆し、太后に幽閉されて死んでいった少帝恭である。

ところで、趙王如意・戚夫人の殺戮を皮切りに、呂太后は次々

と劉氏一族の抹殺を計画し実行する。そのひとりが趙の幽王友。如意の死後に趙に移されたかれは、呂氏の女を妃にあてがわれた。しかし、かれは他の女性を愛して妃を相手にしない。怒った妃は太后に讒言した。趙王が「呂氏　安んぞ王たるを得ん。太后百歳の後、吾れ必ず之れを擊たん」と豪語していると。怒った太后は趙王を呼び付け、見張りをつけて食事も与えず放置した。飢えた趙王は次のような歌を謳って幽死した。時に太后称制の七年、太后の死ぬ前年のことであった。

諸呂　事を用いて、劉氏　微なり。
王侯を迫脅し、彊いて我れに妃を授く。
我が妃　既に妒み、我れを誣うるに惡を以てす。
讒女　國を亂すも、上　曾て寤らず。
我れに忠臣無きも、何故に國を棄てん。
自ら中野を快しとすれば、蒼天も直きに與せん。
于嗟、悔いる可からず、寧ろ早く自ら賊なわん。
王と爲りて餓死するも、誰か之れを憐れまん。
呂氏　理を絶ち、天に託して仇を報いん（『漢書』高五王傳）。

太后に恨みを抱いたまま幽死した趙王のこの歌が「予言」するものは何か。「天に託して仇を報いん」とは、予言というより呂太后への復讐の誓いである。しかし、呂氏一族の最後を先取りして言うなら、これほど明快に「予言」した歌も珍しいと言える。

ところが、この趙王友を幽死させた事件も、「（高后元年）夏、五月丙申、趙王宮の叢臺に災あり」（高后紀）とあるように、事件の数年前、太后の臨朝称制の一年目にすでに天が予告していたことになっている。劉向は、趙の叢臺の火災は「是の時、呂氏の女、趙王の后と爲り、嫉妬し、將に讒口を爲して以て趙王を害さんとす」ることを告げるものであると言う。そしてそれを見抜けなかった趙王の無能が悲劇をもたらしたと言う（五行志上）のであるから、自分の無実を訴えた趙王のこの恨みの歌は何とも皮肉である。更に加えて、「民の禮を以て之れを長安に葬」られたとは。しかしながら、もし趙王が叢台の火災で悟らなかったために悲劇を招いたとするなら、呂太后も趙王のこの歌に将来を悟るべきであった。

実は呂太后がそれらしき不安を抱かなかった訳ではない。高后七年正月丁丑に趙王を幽死させ、『史記』によれば「民の禮を以て之れを長安の民の冢次に葬る」、民の葬礼だけでなく墓所も一般人の所と、戚夫人や如意の時と同様、最後の最後まで徹底して貶めた後、それからちょうど十二日目の己丑の日、太后を不安にさせる現象があった。「（高后七年正月）己丑、日食し、晝も晦し」、日食が現れたのである。日食であれば昼なお暗くても不思議はないが、「太后　之れを惡み、心　樂しまず」、呂太后には無視できなかった。そして側近の者たちにも

らした、「此れ我が爲なり」と（『史記』呂后本紀、『漢書』五行志下之下）。趙王の歌に不吉なものを感じたのであろうか、あるいは呂太后自身がすでに弱気になりかけていたからであろうか。果してこの不吉な兆候は「明年、應ず」、翌八年、現実となった。

確かにこれだと言えない微かな不安、じわじわと襲って来るある種の予感があってか、高后八年三月、呂太后は霸上でお祓いを敢行する。その帰途、「物　倉狗の如きを見、高后の掖を檝し、忽ちにして見えず」、青犬が現れて太后の腋を抱え持ち、あっと言う間に消え去ったのである。これを占ったところ、「趙王如意、祟りを爲す」と出た。呂太后の不安は的中し、この時の腋の傷が悪化して崩じた（五行志中之上）。

傳に曰く、「言の從わず、是れ不艾と謂う。厥の咎は僭、厥の罰は恆陽、厥の極は憂。時に則ち詩妖有り、時に則ち介蟲の孽有り、時に則ち犬旣有り、時に則ち口舌の痾有り、時に則ち白眚・白祥有り。惟れ木　金を沴る」と。これは、お上の号令が民心に沿わず、海内を治めることもままならない、そして僭上沙汰が蔓延し、旱魃が起こって上も下も苦しむと言うものであるが、その結果、「怨謗の氣、謌謠に發し、故に詩妖有り」、人々の怨恨や誹謗が歌謡に現れ、禍を予言する歌が生まれると言う（同上）。まるで朱虛侯劉章・趙王友の歌は呂太后の一連の禍を予言していたと言うかのようである。

二、淮南厲王の民歌について

高祖の末子、厲王劉長。趙王の美人（女官）であった母親は高祖の寵を得て身ごもったが、趙王が謀反の科で逮捕された時、彼女も捕えられて牢につながれた。彼女は、「上に幸せらるるを得て、身ごもる有り」と申し出たが、高祖は趙王に対して怒っていたためこれを無視した。また、呂后から高祖に話してもらおうとしたが、呂后も彼女に嫉妬して承知しなかった。結局、「厲王の母、已に厲王を生むに及び、恚み、即ち自殺」したのである。その話を聞いた高祖は後悔したが後の祭りで、せめて子供を呂后の子として引き取り、母親を丁重に葬ることで埋め合わせをしようとした。そして、長を淮南王に封したのである。厲王は呂后の元で暮らしていたことから呂后の恨みを買うこともなく、それ故、呂太后が権勢を奮った時にも「幸いに患害無きを得」た。呂氏一族の毒牙にかからず存命であったのは、厲王と代王恒（後の文帝）のただ二人であった（注四）。

ところで、厲王は文帝が即位すると、異母兄の文帝より自分の方こそ「最も親」なる身内だとの思いから、「驕蹇にして、數〻法を奉ぜず」、平然と「天子に擬う」振る舞いをし、文帝の六年、ついに反乱を起こすに至った。未然に発覚して都に召喚された厲王は、「先帝の法を廢し、天子の詔を聽かず、居處度無く、黄屋の蓋を爲り、乘輿出入　天子に擬え、擅いままに法令を爲り、漢法を用いず」、「漢の諸侯の人、及び罪有りて

亡げる者を聚收し、匿いて與に居り」、また、「擅いままに人を罪する」などの科で、「當に棄市すべし」と上奏された。それに対して文帝は、「朕　法を王に致すに忍びず」と、改めて列侯に下駄を預け、自ら結論することをさしひかえた。果して、列侯は「法の如くする」ことを結論した。それにもかかわらず、文帝は厲王を断罪するに忍びず、死罪を赦して淮南王の位を取り上げ流刑に処すに止めたのである。「盡く謀に與せし所の者を誅」したにもかかわらずである。ところが厲王は流刑地に護送される道中、「誰か乃公を勇者と謂わん。吾れ安くんぞ能く勇ならん。吾れ驕を以ての故に、吾が過を聞かずして此こに至る。人生まれて一世の間、安くんぞ能く邑邑として此くの如くならん」と侍者に語り、「乃ち食らわずして死」んだ。文帝六年のことである。その後、文帝十二年、民の間に次のような歌が謳われた。

一尺の布も、尚お縫う可し（わずか一尺の布でも二人分の衣を縫うことができる）。
一斗の粟も、尚お舂く可し（わずか一斗の穀でも舂いて共に食べることができる）。
兄弟二人、相い容る能わざるとは（それなのにこんな広い天下のことで、兄弟二人が助けあえぬとは）。

『史記』は「民、歌を作りて淮南厲王を歌う有り」と言うが、実際は文帝と厲王との異母兄弟を謗ったものと見るべきであろう。それはこの歌を聞いた文帝が、「堯舜　骨肉を放逐し、周公　管蔡を殺すも、天下　聖と稱す。何となれば、私を以て公を害さざればなり。天下　豈に我れを以て淮南王の地を貪ると爲さんや」と嘆いたことからもわかる。実の兄弟を放逐したり殺害した古えの聖王が非難されないのは、彼らが私情を捨てて公を選んだからであろう。だが、文帝にしてみれば、まさか聖王には及ぶまいが、さりとて厲王に特別ひどいことをした覚えはない。むしろ、厲王の数々の無礼も大目に見てきたし、反乱を企てた時にも何とか死罪を免れさせようと努力した。何と言おうと兄弟、それも呂氏の禍に遭わずに生き残ったたった二人の兄弟である。それなのに、まるで文帝が厲王の領土を奪おうとしているかのように言われる。もし、文帝に間違いがあったとすれば、それは肉親の情を捨てて「公」を選ばなかったことであろうか。

では、文帝が「私を以て公を害せざる」方法とは何があったか。客観的にはそのチャンスは何度かあった。厲王が辟陽侯審食其を殺した時点で処罰しておくこともできたろう。漢の国法に従わず、自ら天子に擬う行為が目立ち始めた時に手を打つこともできた。あるいは謀反発覚の時点で死刑に処しておくこともできた。しかし、文帝がそのいずれかを選んだところで、結果的には兄弟相い争ったことにしかならないだろう。そもそも厲王が「天子に擬う」まで驕慢な行為を重ねたのは何に起因す

るのか。冷静に判断すれば、文帝が天子になったのは偶然以外の何物でもなかった。呂太后のちょっとした気まぐれで二人の運命は入れ代わっていただろうし、太后の元で実子として育てられた厲王の方が天子になる可能性はあったかも知れないのだ。だから、袁盎の言うように、厲王のために厳格な守役や相をつけ、天子になりたくてもなれない者にはそれなりの教育をしておくべきであったのかも知れない。だが、この「民歌」は文帝の思い煩うようなものではなかった。

厲王と文帝の二兄弟の争いを謗ったとするこの「民歌」は、事件の後に謳われているという点で多くの場合と異なっている。それにしても、厲王の死後六年、いいかげん厲王のことも人々の記憶から遠のいていたであろう頃に、二人を謗る歌が生まれるのは不自然である。しかも、事件の後に謳われたのでは「予言」の意味がなくなるのだが、これはどういうことか。司馬遷は、この「民歌」が「兄弟二人、相い容ること能わざるとは」と嘆く理由を厲王・文王の骨肉の争いであると見るが、文帝が厲王に極めて寛大かつ同情的であったことから、それは当を得ていない。従って、この「民歌」は厲王・文帝の二人ではなく、別の二人を歌うものと考える方が自然である。それは司馬遷が、「淮南・衡山、親骨肉為り、疆土は千里、列して諸侯と為るも、蕃臣の職に遵いて以て天子を承輔するを努めずして、専ら邪僻の計を挾み、謀りて畔逆を為し、仍りに父子再び國を亡い、各〻其の身を終えず、天下の笑いと為る」と言うところに、その謎を解く鍵がある。すなわち、父（厲王）は従兄の文帝と、子供は淮南王安と衡山王賜と、二代にわたって争ったことを謗るものと見ることである。ここに、この「民歌」は一気に予言性を帯びてくることになる。

文帝十六年、文帝は「淮南厲王、法を廃てて軌わず、自ら國を失い蚤死せ使むるを憐れみ」、残された三子に厲王の領地を三分して、安を淮南王、勃を衡山王、賜を廬江王とした。その後、景帝四年、領地替えで賜は衡山王となった。もともと険悪な二人であったが、淮南王が武安侯田蚡（注五）にそそのかされて謀反を起こす準備した時、衡山王が「心に賓客を結びて以て之れに應じ」たのは、衡山の地を淮南の「并する所と為るを恐れ」たからに過ぎない。その二人が「前郤を除きて」語り合ったのは、「反具を約束し」たこの時だけであった。しかし、この反乱は事前に発覚して破綻し、淮南王も衡山王も「自ら剄殺し」、淮南・衡山の領地は没収され、それぞれ九江郡と衡山郡として直轄されたのである。

以上のように、この「民歌」は淮南王安と衡山王賜との不仲を予測し、共に悲惨な最期を遂げて国まで除かれるという悲劇を予言するものなのである。更に司馬遷は念入りに、彗星の出現でこの惨劇に伏線を張っている。田蚡が淮南王に「方今、上太子無し。大王　親しく高皇帝の孫にして、仁義を行うこと、天下に聞こえざる莫し。即し宮車一日晏駕すれば、大王に非ざれば當に誰か立つべき者あらん」と謀反を示唆し、田蚡のもく

ろみ通り淮南王がその気になったところ、建元六年、彗星が現れたと記録するのである。「淮南王　心に之れを怪しむ」、さすがの淮南王も気になった。その時、ある者が淮南王に言った。「先に呉の軍の起こりし時、彗星出づ。長さ數尺なるも、然れども尚お血を流すこと千里なり。今、彗星の長きこと天を竟む。天下　兵　當に大いに起こるべし」と。

この彗星の出現を流血の予兆として恐れたことは、先の「民歌」の予言する内容の伏線として非常に効果的である。司馬遷がどれほど厲王劉長・淮南王劉安・衡山王劉賜の行為を「此れ獨り王の過に非ざるなり」と庇おうとも、「亦た其の俗は薄にして、臣下も漸靡して然ら使むるなり。夫れ荆楚は慓勇輕悍にして、好んで亂を作す」と、荆楚の国民性が反乱を引き起こしたのだと言おうとも、「民歌」はかれらの愚行を嘲笑することを止めない。そしてそれは権力争いに終始する王朝（劉氏）を笑うことになるのである（以上、『史記』淮南厲王列傳、『漢書』淮南王傳）。

三、潁川の兒歌について

淮夫は景帝から武帝にかけての人。景帝の時、父親の淮孟と共に呉を攻めたところが、父親が戦死した。当時の軍法では「父子俱に從軍し、事に死すこと有れば、喪歸に與るを得」とあるように、父子が共に從軍してどちらかが戦死した場合、喪の為に帰国することが許された。しかし、淮夫は帰国するのを止めて、「願はくは呉王、若しくは將軍の頭を取りて、以て父の仇に報いんことを」と願い出、呉軍に突進して「殺傷する所數十人」、自ら「身中の大創十餘、適々萬金の良藥有り、故に死すこと無きを得」た。しかも、傷が少し癒えると、呉の様子がよく解ったからもう一度やらせてくれるよう願い出た。これを聞いた将軍は淮夫を「壯義」として感じ入った。この事で有名になった淮夫を、景帝は中郎將に取り立てたが「法に坐して去」り、武帝の時には太僕となったものの、これまた竇甫（竇太后の弟）を殴って左遷されたり、数年後にはまた「法に坐して官を去る」など、浮沈の多い人生を送った。かれは「人と爲り剛直にして酒に使い（師古曰く、「使酒」とは酒に因りて気を使うなり）、面諛を好まず」とあるように、性格は剛直、酒癖が悪く、面と向かってのお世辞を嫌った。それはかれが任侠の士の一面を持ち合わせていたこととも無関係でない。司馬遷は言う、「貴戚の諸々の有勢、己の右に在るものは、禮を加うるを欲せず、必ず之れを陵る。諸々の士、己の左に在るもの、愈々貧賤なれば、尤だ益々敬し、鈞を與う」、「夫れ、文學を好まず、任侠を喜み、已ず然諾す」と。

しかしながら、淮夫は「家　數千萬を累み、食客　日に數十百人。陂池田園、宗族賓客、權利を爲し、潁川に横いままにす」とも言われる。『史記』魏其侯列傳も『漢書』淮夫傳も、ここに民の恨みが生まれたかのごとく、「潁川の兒、之れを歌いて

曰く」と次の歌を載せる。

潁水清ければ、漁氏は寧し（潁水が清いうちは漁氏も安泰）。
潁水濁れば、漁氏は族せらる（だが潁水が濁った日には、漁氏は皆殺しにされよう）。

漁夫への恨みを吐露するかのようなこの歌は、『史記』では漁夫一族の不幸を予言する歌として記録される。もし漁夫が民に恨まれたのが事実であれば、予言が的中したかどうか問題ではない。顔師古が「深く之れを怨嫉す。故に此の言を爲す」と注するまでもなく、予言しようとしまいと、また、予言が当たろうと当たるまいと、漁氏が「族せらる」ことは民の切なる願望であったろうから。ところが、ここに大きな疑問が残るのである。それは、「諸々の士、己の左に在るもの、愈々貧賤なれば、尤だ益々敬し、鈞を與う」と言われた漁夫、教養はなかったが「任俠を好み、已ず然諾す」と言われた漁夫が、なぜ民から恨まれるようなことになったのかという疑問である。班固はともかく（注六）、司馬遷は「游俠」を高く評価する。「其の言は必ず信、其の行いは必ず果（『論語』子路）。已に諾すれば必ず誠あり、其の軀を愛まず、士の阨困に赴き、既已に存亡死生す。而れども其の能を矜らず、其の德を伐るを羞ず。蓋し亦た多とするに足る者有り」（『史記』游俠列傳）と、身の危険を顧みず人の窮地を救う「游俠」の倫理と行動を称えた。そのかれが漁夫をただの悪人にしてしまうのは不可解である。確かに漁夫を「術無くして不遜」とも評するが、先の漁夫の任俠気質を言うのと隔たりがありすぎる。

そこで、様々な角度からこの「兒歌」の裏の意味を探ってみると、非常に興味深い発見がある。結論を先取りすれば、この歌は漁夫に警告を発するための歌であり、漁夫に借りて、他の人物を非難しているのである。

まず、この「兒歌」を、「剛直にして酒に使う」漁夫の悪い癖から、漁夫はいずれ酒で失敗すると予測し、酒の席では気をつけよと警告した歌と見ることが可能である。すなわち、「漁夫は酒さえ飲まなければ安泰。しかし、漁夫が酒で失敗したら最後、漁氏は一族もろともあの世行き」というもの。事実、「數々酒失を以て丞相に過めらる」と自らも認めるように、武安侯田蚡との酒宴の席で大失態を演じた。そして、これが直接のきっかけで漁夫は処刑されたのである。確かに酒の失敗を「潁水」の清濁になぞらえるとは、なかなか気が利いている。しかし、これではいまひとつ「兒歌」としての深みに欠ける。ただし、後述するように、これも田蚡の陰謀であったとすれば歌の意味も一層深まるが。

また別の見方は、「任俠を喜み、已ず然諾す」る一途な漁夫に、外戚の勢力争いに巻き込まれないよう警告した歌だと見るものである。すなわち、「漁夫よ、回りの人間に気をつけろ。いつ葬られるかわからない」と。潁水の清濁を外戚の浮沈にた

とえる。あるいはまた、外戚に利用されて「純真な淮夫がこのまま野心を抱かなければ安泰。だが、下手に野心を抱くと一族皆殺しの目に遭うだろう」と。潁水の清濁は淮夫自身の心の清濁となる。

だが、いずれにせよこの歌には、淮夫と魏其侯竇嬰（文帝の皇后にして景帝の母竇氏の従兄の子）、それに武安侯田蚡（景帝の皇后にして武帝の母王氏の同母弟）という二人の外戚が巧みに隠されている。竇太后を失って権勢の衰え始めた魏其侯と、これまた勢力を失い食客が逃げて行って取り残された淮夫とは父子の如く交際した。そんな時、たまたま丞相の田蚡が魏其侯を訪問すると口にした。魏其侯も淮夫もそのつもりで待っていたが一向に現れない。淮夫が迎えに行ってみると田蚡はまだ寝ており、あれは冗談だと言う。ここから任侠者淮夫の本領が発揮される。淮夫はそんな冗談を認めず強引に田蚡を連れて行き、宴席では田蚡に敵意を剝き出しにした。また、田蚡が魏其侯の田地を求めた時には、魏其侯も淮夫も、それを田蚡が外戚王氏を笠に着た横暴な要求だとしてはねつけた。ここに田蚡は淮夫への反撃を開始するのである。

まずは手初めに、「淮夫の家、潁川に在りしとき、横（よこしま）なること甚だし。民　之れに苦しむ」、よくよく調査されたし、と上書したことである。ところが、武帝は「此れ丞相の事、何をか請わん」と一蹴した。次は田蚡の婚礼の祝宴の時。「酒の上でよく失敗するので」と断る淮夫を無理やり連れて行き、宴席で魏其侯を侮辱し、それに腹を立てて罵った淮夫を不敬罪で弾劾し拘禁したのである。

ところで、この「兒歌」が生まれた原因とする潁川での淮夫の所業、「家　數千萬を累（つ）み、食客、日に數十百人。陂池田園、宗族賓客、權利を爲し、潁川に横（はし）いままにす」という司馬遷の記録は、この後の武安侯田蚡による魏其侯追い落としのための弾劾、「淮夫　姦猾に通じ、細民を侵し、家　巨萬を累み、潁川に横恣し、宗室を陵轢す」に引きずられているのではないだろうか。武安侯田蚡は、魏其侯竇嬰を抹殺して外戚竇氏を撲滅するために、竇嬰と特に親しく、しかも任侠心ゆえに反抗的な淮夫を利用したのではないか。淮夫を抹殺することは、淮夫を弁護し続けた竇嬰を引きずり降ろすことにもなるからである。そのように考えると、田蚡の祝宴で淮夫がしたことは田蚡には充分予測できたこと、否、公衆の面前で魏其侯に恥をかかせれば淮夫が何かしでかすことを田蚡は計算して謀ったものに見える。武帝にも軽くあしらわれ無視された形となった淮夫弾劾も、淮夫が何かしでかせば巻き返しの絶好のチャンスとなる。果して一途な淮夫は、その罠に落ちたのである。そして、魏其侯もまた淮夫を救おうう奔走したが、逆に自身も告発され、努力の甲斐なく「（元光）五年十月（注七）、悉く淮夫及び家屬を論（さだ）む」、淮夫とその一族に死刑の判決が下った。更に田蚡は追い打ちをかけるように、「蜚語有り、悪言を爲して上に聞す」、自ら流した天子誹謗の数々を、魏其侯が言ったとして天子の耳

に入れた。ついに魏其侯は「十二月晦を以て論めて渭城に弃市され」たが、田蚡が竇嬰の処刑をこれほどまでに急いだのは、武帝が「魏其を殺すに意無し」であったこと、また、春になって死刑ができなくなっては困るから、否、それ以上に立春の特赦で竇嬰が処刑を免れるのを恐れたからにほかならない。

実は司馬遷も、「衆庶　載んぜず、竟に悪言を被る」ような結果を生んだことを、かれ一人に原因があるとは見ていない。「誠に時變を知らざる」魏其侯と「術無くして不遜」の淮夫とが、「両人相い翼けて、乃ち禍亂を成し」たにほかならないと見ており、また、「武安　貴を負んで權を好み、杯酒に責望し、彼の両賢を陥る」と、田蚡がその飽くなき権力欲から竇嬰・淮夫の優れた人物を陥れたのだと言う。そうであればなおさら、この歌を淮夫をなじるものとは理解し難い。司馬遷のこの論評は、この「兒歌」が直接に淮氏を謗ったものでないことを暗示している。そして、表面上は淮夫を攻撃し淮氏一族皆殺しを切望するかのように見せながら、その実は、その元凶である武安侯田蚡を、ひいては外戚そのものを非難攻撃しているものであると言えよう。それ故、先の趙の叢台の火災によって趙王に身の危険を知らせようとしたように、この「兒歌」は淮夫に外戚の禍を知らせようとした歌であると考えてもよい。更に興味深いことには、淮夫と竇嬰が処刑された後、田蚡は病気になって「專ら呼服謝罪す」、自分が悪かったとわごとに言い、巫の見立てによると、それは竇嬰と淮夫とがかれを殺そうとしてるからであったという。この「兒歌」がそこまで予言していたとは言わないが、司馬遷が田蚡のことを、「上　魏其の時自り武安を直しとせず、特だ太后の爲の故のみ」、「武安侯をして在ら使めば族せん」、武帝は王太后のために目をつぶっていただけのこと、武安侯が生きていたら一族皆殺しにしてやったものをと結んでいるのは、この「兒歌」に謳われた淮氏は田蚡であってしかるべき、まるでそう言うかのようである。

四、王太后をめぐって

十一代皇帝元帝の皇后王氏。王家で侯となった者は十人、大司馬となった者は五人、外戚としてこれほど盛んなものはない。元帝が即位すると、皇后は父王禁を陽平侯に封じ、三日後には王禁の弟王弘を長楽衛尉、王禁が死ぬと皇后の弟王鳳に陽平侯を継がせた。そして元帝が崩じて太子（成帝）が即位するや、王皇后は皇太后として君臨し、太后の兄弟、王鳳の異母弟譚を平阿侯、商を成都侯、立を紅陽侯、根を曲陽侯、逢時を高平侯とした。かれら五人は同日にして諸侯に封ぜられたので、世間ではこれを「五侯」と呼んだ。「五侯」は権力にもの言わせて四方から珍宝や賄賂をかき集め、財力にもの言わせて「後庭の姫妾、各々數十人、僮奴、千百を以て數え、鐘・磬を羅ね、鄭女を舞わしめて倡優を作し、狗馬馳逐する」ような私生活、その住まいと言えば「大いに第室を治め、土山漸臺を起こし、洞

門高廊閣道、連屬して彌望す」るような大邸宅で、遊興に耽り奢侈を競っていた。そんな時に「百姓」が歌ったのが次の歌である。

五侯　初めて起こり、
曲陽　最も怒ぶる。
高都を壞決して、
外杜に連竟す。
土山漸臺、
西の白虎に象る（注八）。

前二句は「この世に初めて『五侯』が現れた。その中でも曲陽侯の勢いが最も盛ん」と曲陽侯王根を名指しで謳う。同様に後四句の「高都水（長安の西にある）の支流を作って外都里まで水を引き、その築山と台とはまるで天子の白虎殿のよう」も王根の邸宅を言うものと理解できる。あるいは、中二句を成都侯王商を謳っていると見ることも可能である。成都侯は「長安城を穿ち、灃水を引内し、第中の大陂に注ぎて以て船を行らせ」、成帝自身もそれを見て「意に恨み、内に之れを銜み、未だ言わず」、何とか怒りをこらえたとあるからである。また、最後の二句は、後に曲陽侯の邸宅を訪れた成帝が「園中の土山漸臺、白虎殿に似類す」るのを見、怒り心頭に達したとあることから、王根を謳うとも解し得る（『漢書』元后傳）。それとも、権勢を好む人間は互いに競い合い、その欲望は際限がないと両者を謗るものであろうか。ともあれ、表面的にはあくまで「五侯」の勢いの良さ、羽振りの良さ、邸宅の素晴らしさを謳うのだが、この歌を「五侯」を称えるものだと信じる者はいない。なぜならこの歌は成帝が即位した建始元年に起きた予兆と無縁でないからである。

成帝建始元年四月辛丑、夜、西北に火光の如きもの有り。壬寅、晨、大風西北従り起こり、雲氣赤黄たりて、天下に四塞す。日夜を終えて下りて地に著く者は黄土塵なり（『漢書』五行志・下之上）。

成帝は即位して間もなく赤黄色の雲が現れ、一夜にして黄土塵に覆われるという不吉に見舞われた。これは「五侯」を封じたその日の出来事で、かれらの爵位や封土が分を越えているとの天の戒めであり、災いの兆しである。そもそも「黄」の現象とは、「日の上　黄光し、散ぜずして火の如く然り。黄濁の氣、天下に四塞すること有り」に生じ、それは「賢を蔽い道を絶つ」ことを意味している。すなわち、「當に賢人を觀て其の性行を知り、推して之れを貢むべき」を知らず、その非を改めなければ「嗣あらず」という最悪の事態を招くことを言うものである（同上に引く『京房易傳』）。果して成帝には子供が育たなかった（注九）。

このように、「五侯」はその出現の時点で異常視されていた。それゆえ、この歌は天子の白虎殿を模した邸宅に住み、「赤墀青瑣」という天子の制を用いる「五侯」の僭越ぶりを謳うことは確かである。しかし、これは「五侯」の奢侈や僭上を非難するだけでなく、かれらの匿った「姦猾・亡命」者や賓客が「羣盜を爲し」ても見逃されているという事実、その実害を被った者の恨み、更には王太后の専横を謗り外戚の横暴を糾弾する声が見え隠れしている。一見「五侯」を呪い、王太后並びに外戚王氏を恨み、皇太后にいいように操られているふがいない成帝を罵り（注十）、政治そのものに対する不信を爆発させる。また、ひとたび権力を握った者は他の者より上でなければ満足できないという、人間の欲望の際限のなさをも嘆くが如きこの「五侯」の歌は、「黄土塵」に覆われる異常現象とともに、火徳（赤）の漢王朝に代わる土徳（黄）の出現を暗示するもので（後漢末の黄巾の乱を容易に連想させる）、王太后の甥であり、後に漢王朝を簒奪した王莽の出現をも予言していたことになる。それは、次に挙げる謠にも通ずるところである。

燕よ燕、尾は涎涎たり（燕よ燕、尾がつやつや輝いている）。張公子　時に相い見る（張公子はいつも一緒にその燕を見ている）。

木門倉琅の根（宮殿の門鐶の根っこの所に）、燕　飛來して、皇孫を啄む（燕がやって来て皇孫を啄む）。皇孫死して、燕　矢を啄む（その皇孫が死んだ後、燕は矢を啄む）。

「五行志・中之上」は、この「童謠」を「其の後、帝　微行を爲して出遊するに、常に富平侯張放と俱にし、富平侯の家人と稱して、陽阿主を過りて樂を作し、舞者趙飛燕を見て之れを幸す。故に曰く、『燕よ燕、尾は涎涎たり』と。美好の貌なり。張公子とは、富平侯を謂うなり。『木門倉琅の根』とは、宮門の銅鍰を謂う。將に尊貴ならんとするを言うなり。後、遂に立ちて皇后と爲る。弟昭儀、後宮の皇子を賊害し、卒に皆に辜に伏す。所謂『燕　飛來して、皇孫を啄む。皇孫死して、燕　矢を啄む』なり」と、趙皇后姉妹のことを予言するものと解説している。そして、この「予言」は「成帝紀」にある次の記述と完全に一致する。

（鴻嘉三年）冬十一月、甲寅、皇后許氏　廢せらる。
（永始元年）夏四月、婕妤趙氏の父臨を封じて成陽侯と爲す。
五月、舅曼の子、侍中騎都尉光祿大夫王莽を封じて新都侯と爲す。
六月、丙寅、皇后趙氏を立つ。
是の歳（元延元年）、昭儀趙氏、後宮の皇子を害す。

この「趙氏」こそ、「童謠」で謳われた「燕」こと趙飛燕であり、「昭儀趙氏」こそ趙飛燕の妹である。成帝が踊り子「燕」姉妹にすっかりいれあげ、姉妹共に成帝の寵愛を受け、ついに姉は皇后の座を、妹は昭儀の座を手に入れ、妹の燕は後宮の皇子を殺し、あげくのはてに処刑されたのである。「童謠」は「燕燕」と繰り返すことで趙氏の姉妹を暗示しているのであろうし、「燕、矢を啄む」と結ぶことで趙氏の悲惨な最後を予言するのであろう。しかしながら、実はこの予言は趙氏姉妹のことだけにとどまらない。すなわち、先の「百姓」の謳った「五侯」の歌と同様、成帝に後継者ができないことの予言であり、更にはこの「童謠」のすぐ後に掲げる「謁謠」とともに、王莽の出現を予言する歌と解してよい。「建始以來、王氏　始めて國令を執り、哀・平　短祚にして、莽　遂に位を簒う。蓋し其の威福の由來する所の者、漸あり」（成帝紀、贊）と、すでに人々は漢王朝の終わりを予測していたと言える。その「謁謠」とは次のようである。

邪徑　良田を敗り（歪んだ小道が良田をだめにするように）、
讒口　善人を亂す（讒言は善人をだめにする）。
桂樹　華あるも實らず（桂は花開けども実らず）、
黄爵　其の顛に巣くう（黄色い雀が桂の木のてっぺんに巣を作る）。
故（いにしえ）人の羨む所と爲り（昔は人から羨まれたが）、
今　人の憐れむ所と爲る（今では人から哀れまれ）。

ここにも不吉な予言が隠されている。『漢書』は「『桂』は赤色にして、漢家の象なり。『華あるも實らず』とは、繼嗣無きなり。王莽　自ら黄象と謂い、黄爵　其の顛に巣くうなり」と、これを王莽が漢王朝を簒奪する予言だとしている。この「謁謠」に王莽の出現を予言するとするのは必ずしも意外なことではない。「孝元后　漢を歴ること四世、天下の母と爲り、國を纔（わ）けること六十餘載、羣弟　權を世々にし、更々（こも）國柄を持し」た外戚王氏の「邪徑」は、漢王朝の「良田」を損なった。かつては奢侈を誇った「五侯」も、すでに翳りが見え始め、遠からず一網打尽に遭うだろう。それをやってのけるのは「華あるも實らざる」成帝でもなければ、今や「人の憐れむ所と爲り」果てた「五侯」でもない。人々はここに王莽の出現を予言したのである。それが結果的に「其の顛に巣く」って漢王朝を乗っ取ったのであっても。

いったい、王莽は漢王朝から王位を簒奪した悪人として定着している。その事実は否定しようもないが、「五侯」の時代、かれはそれほどの悪人ではなかった。王氏は「五將十侯」を生んだにもかかわらず、王莽の父王曼は若くして死んだために侯に列せられなかった。「皆な將軍・五侯の子にして、時に乘じて侈靡し、輿馬聲色佚游を以て相い高ぶる」従兄弟たちの中で、

王莽は「獨り孤貧」であった。そのかれは、「因りて節を折りて恭儉を爲し、禮經を受け、沛郡の陳參に師事して、身を勤め學を博め、被服は儒生の如くし、母及び寡嫂に事え、孤の兄子を養い、行い甚だ敕備なり」と、生活は質素で、母には孝を尽くし、寡婦となった嫂や兄の遺児を養うという人となりであったという。もちろん、これを王莽の計算し尽くした芝居だと見ることもできる。世父大將軍王鳳の病床を見舞った時、「親ら藥を嘗め、亂首垢面、衣帶を解かずして月を連ね、これをきっかけに世に出たのであるから、あるいはこれが孤児王莽の生き方であったのかも知れない。その後の王莽は人情の機微を逸速く察知する能力を身につけていったようであるが、少なくとも、王莽には「五侯」のような傲慢な態度はなかった。事実、王莽は新都侯となった後も質素な生活を続け、領国の吏民からも信頼を得ていたという（王莽傳上）。今、その後の王莽にではなく、この事実だけに注目するなら、この予言は必ずしも王莽の出現を忌むものではない。元帝以来四代、六十年にわたって権勢をほしいままにしてきた王氏、その頂点にあった「五侯」の存在は、人々にとって非難の対象でしかなかった。このような王朝に人々が期待するものは何であったろうか。人々は王莽に新しい世の中を期待したのではないか。もしそうであれば、この予言は外戚王氏の殲滅と王莽の新時代を期待する歌となる。「黄爵　其の顛に巣くう」の一句に囚われるなら穿ち過ぎとなろうが、これらの「謠」が諸悪の根源王氏を管理できない成帝の罪を糾弾し、残酷にも成帝の死を待ち望むものであると理解することは許されよう。また、次の「童謠」も成帝を謗るものである。

井水　溢れて、竈煙を滅ぼす（井戸水が溢れて竈の煙りを消してしまう）。
玉堂に渥ぎ、金門を流す（その水は美しい宮殿に流れ込み、美しい門を流し去る）。

およそ縁起が良いと言えないこの歌は、元帝の世に流行した「童謠」であるが、何と成帝が即位した二年目（建始二年）に起こった出来事を予見する歌とされている。成帝紀に「（建始二年）三月、北宮の井水　溢出す」とあり、これがすでに元帝の時代の「童謠」に予見されていたとするのである。

井水は陰なり。竈煙は陽なり。玉堂・金門は至尊の居なり。陰盛んにして陽を滅ぼすに象り、竊かに宮室の應有り。王莽　元帝の初元四年に生まれ、成帝に至って侯に封ぜられ、三公と爲りて政を輔け、因りて以て位を簒う。

陰気が陽気を滅ぼすとは宮殿が滅びること、すなわち天子が死ぬ（あるいは王朝が転覆する）ことの予兆にほかならないというのである。しかも、歴史事実がその予兆を裏付ける。『春秋

左氏傳』昭公二十五年に次のような「童謡」が見える。

鸜や鵒や、公　出でて辱めらる（ははっちょうよ、殿様は国を出て恥をかく）。
鸜鵒の羽、公　外野に在り（ははっちょうが羽ばたいて、殿様は国外の田舎にいる）。
往きて之れに馬を饋り、鸜鵒　跦跦たり（使いの者が馬を贈り、ははっちょうは跳ね回る）。
公　乾侯に在り、褰と襦とを徵む（殿様は乾侯にいて、袴と下着を求める）。
鸜鵒の巣くい、遠きかな遙遙（注十一）たり（ははっちょうが巣を作り、殿様は不安がる）。
裯父　喪勞し、宋父　以て驕る（裯父は苦労して死に、宋父は驕る）。
鸜鵒鸜鵒、往くに歌い來るに哭す（ははっちょうよ、ははっちょう、殿様がでかける時は歌い、帰る時は泣き叫ぶ）。

この「童謡」は昭公の前の文公・成公の世にはやったものだという。それが何と数十年後の昭公の代になって現実となった。ここに出て来る「裯父」とは昭公の名、「宋父」とは次の定公の名なのである。

昭公の時に至りて、鸜鵒有り來りて巣くう。公　季氏を攻め、敗れて齊に出奔し、外野に居り、乾侯に次る。八年にして外に死し、歸りて魯に葬らる。昭公　名は裯。公子宋立つ。是れ定公爲り（五行志・中之上）。

昭公の代になって鸜鵒が巣を作った。ある者が文公・成公の時の童謡を思い出して、「今　鸜鵒　来たりて巣くう。其れ將に及ばんとするか」、ははっちょうが飛んで来て巣を作った今、必ずや昭公に災いが降りかかるであろうと予言した。果して昭公は「（二十五年）九月戊戌、季子を伐ち、（季）公之を門に殺し、遂に之れに入」ったものの、結局は魯の国における季氏の存在を認めた人々が昭公を囲んで「遂に公の徒を伐」ち、「己亥、公　齊に孫」れた。そして、八年間も外地を点々とし、魯からも斉からも、また晋からも受け入れられなかった昭公は、最後は「乾侯（晋の地）に在り」、病んでここに薨じたのである。翌、定公元年夏、「六月癸亥、公の喪　乾侯自り至る。戊辰、公　即位す」、昭公の弟、名は宋、定公が即位し、翌七月、昭公は魯に葬られたのである（『春秋左氏傳』昭公二十五年至三十二年、定公元年）。

昭公の生まれるはるか数十年も前に、「乾侯」「裯」「宋」という固有名詞まで読み込む歌ができるなど、常識で考えて不可能である。あるいは古い「童謡」に時の人物を織り込んだ替歌とも考えられる。しかし、今ここで注目すべきは、元帝の時の「童謡」が早くも成帝の終わりを告げていたとすること、す

なわち、先帝の世に歌われた「童謡」の内容が、「成帝の建始二年三月戊子、北宮の中の井泉、稍々上り、溢出して南に流」れた災害と一致したこと、そしてそれが「春秋の時、先に鸜鵒の謡有り、而る後、來り巣くうこと有るの験に象る」（五行志・中之下）ものであったことである。これこそ、王莽が現れて漢王朝を簒奪したことの予言なのである。当然のことながら、『漢書』は王莽を漢王朝の簒奪者とする。従って、これらの「謡」は王莽の簒奪を予言したものとするのであろうが、王莽という特定の人物であるより、むしろ成帝の世を革める誰かを期待したものと見ることの方が本来の姿ではないか。そして、これらは外戚を呪い元帝・成帝を馬鹿にし、無能の天子は無用だという人々の不満を、当時の封建社会で意思表示する安全かつ効果的な方法であった。

おわりに

今、「童謡」といい「兒歌」といい、あるいは「民歌」といい「百姓歌」といい、伴奏のあるなしにかかわらず共通するのは、いずれにも隠された毒気があり、それぞれに付加される「予言」が存在すること、また、「童」「兒」「民」「百姓」のいずれを借りようと、どれも誰が謳ったかわからないことである。誰が謳ったかわからないという無責任さは、内容の曖昧さと相い俟って、謳う者に安心感と解放感を与える。なぜなら、曖昧な表現は謎を隠し易く、隠された謎が複雑であればあるほど、権力から身を守ることになるからである。だから緊張感が高まれば高まるほど、危機が迫れば迫るほど、不平不満を巧みに隠し、どのようにでも解釈できる可能性を持たせて逃げ道を作っておかなかればならない。俗に「好死不如悪活」と言われるように、死んでしまっては元も子もない。季布が項羽に殉ずるような無駄な死を選ばなかったように、司馬遷が恥辱に耐えて生きたように、軽々しくは死なないことが中国人にとって大切なのである。とりわけ富も力もない普通の人々にとっては、ともかくも生き続けることこそがすべてである。それだけに、これらの「歌」や「謡」は、不平不満を爆発させるけれども、敢えて命を失うような危険は冒さない生活者の知恵であり方法であった。危険は冒さないが諦めることもしない無力な人々が、ほんのひと時にせよ憂さを晴らして喜ぶ。いろいろな形でカムフラージュしながら日頃の鬱憤を晴らしわだかまりを一掃する。私はこれらの「歌」や「謡」は、誰もが安心してできる反抗であり反逆、古代中国人の反逆の精神の賜物であると考えている。だからこそ為政者も無視できなかったのである。概して為政者はこのような歌・謡を軽視する（あるいは軽視したがる）が、為政者には無視したくとも無視できないことを知る人々は、ますます毒気の強い、時には残酷な歌・謡を作って目指す相手をからかい馬鹿にし、時には愚弄し、そして瞬く間に流行させる。その傾向は「童」に託した「謡」として、後漢から六朝にかけ

てより一層顕著となるのである。

本稿で取り上げた「歌」や「謠」は前漢のすべてではない。しかし、『史記』・『漢書』に記録された「歌」や「謠」は、いずれも当時の人々の恨みを吐露するものであり、その予言するところもその実は人々の切なる願いであり、将来への期待――それが特定の個人の抹殺を意味しようとも、王朝の転覆を意味しようとも――を代弁したものであったと言える。そして、かれらの期待が裏切られることなく願いが叶い、恨みの相手が悲惨な最後を遂げれば、その最後が悲惨であればあるほど、その「謠」は予言的効果を発揮することになるのである。

注

注一　江口一久編『ことば遊びの民族誌』（一九九〇年、大修館書店）はギリシャ・ローマ、上海語、満州語、朝鮮語、日本語、インド、ビルマ、アフリカの諸言語、モンゴル語など、世界の言語の言葉遊びを例を挙げて解説する。その中で「Ⅳ　不可知なものを探る」は、主として言語学の観点から後漢以降の拆字と讖との関係に触れている。

注二　古代漢語では、後世、拆字・測字、あるいは離合と呼ばれる言葉遊びがあり（卯金刀＝劉、牛十一＝生、千里草・十日卜＝董卓、鳳＝凡鳥＝凡人など）、これも暴虐者を呪う「謠」に用いられる。

注三　清の杜文瀾『古謠諺』は歴代の「歌」「謠」「諺」を輯めたもので、工具書としての価値は高い。楊蔭深『中国俗文学概論』（一九四六年、世界書局）は「謠」の修辞的特色に触れ、本邦では狩野直喜『兩漢學術考』（一九六四年、筑摩書房）・増田清秀『樂府の歴史的研究』（一九七五年、創文社）が「謠」の文学性について簡単に触れている。

注四　もう一人、曹夫人との間に生まれた斉王肥がいたが、かれは恵帝在位中に病死しているから、呂太后の時代に高祖の王子として無事であったのは二人だけであった。

注五　武安侯田蚡については、本論「三」に詳しい。

注六　班固は『史記』以後の侠客をも追加して「游侠傳」を立てたが、「其の温良泛愛にして、窮を振い急を周い、謙退して伐らざるを観れば、亦た皆な絶異の姿有り」とはいえ、総じて言えばやはり「匹夫の細なるを以て、殺生の權を竊み、其の罪　已に誅を容さず」と、「游侠」を社会秩序を乱す張本人とみなして司馬遷とは異なった価値判断を下す。

注七　『史記』漢興以來將相名臣年表では、田蚡は元光四年に卒したことになっており、『漢書』武帝紀も「（元光）四年、冬、魏其侯竇嬰　罪有り、棄市せらる。春、三月、乙卯、丞相蚡　薨ず」と言うことから、おそらく潅夫及びその一族が裁かれたのは四年十月、その年の十二月に魏其侯竇嬰が処刑され、同四年三月に武安侯田蚡が悶死したことになろう。

注八　『漢書』元后傳に「象」の字はないが、同傳の下文に

「園中土山漸臺似類白虎殿」とあり、また『太平御覧』巻四百六十五に「象西白武（原注、白虎殿の名）」、『文選』潘安仁「西征賦」李善注に「象西白虎」とあるので、それに従って改めた。

注九　成帝には許皇后との間に男子と女子が生まれたがすぐに死亡し、許皇后は趙飛燕（趙皇后）に誣告されて廃された。また、班倢伃との間に生まれた男子も、生後数カ月で死亡し、曹宮との間に生まれたが子供は趙昭儀に殺された。その上、成帝の寵愛を十数年ほしいままにした趙氏姉妹には、遂に子供ができなかった。

注十　元帝と王皇后との間に生まれた十二代皇帝成帝は、祖父宣帝に愛され、元帝がまだ太子の時に「世嫡皇孫（後継ぎの孫）」となり、宣帝が崩じて元帝が即位すると、わずか三才で太子となった。元帝は傅昭儀との間に生まれた恭王を後継者にしようとしたが、王皇后の外戚は許さなかった。「五侯」に象徴されるように、王氏の権力は絶大であり、王氏によって即位できた成帝には実権がなかった。

注十一　『漢書』は「搖搖」に作る。不安のさまをいう。今、「搖搖」で解釈した。

【附記】　三月二十日付『人民日報』（海外版）に「元宵」と題する七律が掲載され、日本でも数日後に新聞紙上で紹介された。そして四月二日、今後はシンガポールの新聞『聯合早報』が、作者朱海洪氏のロサンゼルスでの談話を掲載し、事の経緯を説明している。その七律とは「東風拂面催桃李／鷂鷹舒翅展鵬程／玉盤照海下熱涙／游子登台思故城／休負平生報國志／人民育我勝萬金／憤起急追振華夏／且待神州遍地春（『聯合早報』では「故城」を「故国」、「急追」を「直追」に作る）」というもので、ゴチックの文字を並べれば「李鵬下台、平民憤」となり、明らかに李鵬を攻撃するスローガンが隠されている。しかも、表面上は遠く異郷の地から故国中国に貢献せんとする愛国の詩であるのだが、その実は「東風」は民主化を、「桃李」は学生や知識人を、「鷂鷹」は民主化運動に参加した人々を、「鵬程」は大いなる民主化を隠しており、「一九八九年春、自由と民主の風が学生たちを喚起し、運動に参加した多くは民主化を実現できると信じた。だが、それは惨劇に終わった。祖国を離れている中国人は、あの時の天安門故城を思い出して涙が溢れる。真の意味で報国の志に背くまい、なぜなら人民が我々を育んでくれたことは万金にも勝ることなのだから。だからこそ奮起して中国を救おう、遠からず中国も民主化されるはずだ」となって、海外の同胞から国内にいる学生や知識人へのメッセージを謳い込んでいると思われる。これは本稿で論じた中国古代の「謠」の現代版にほかならない。